

論 説

## アメリカにおける旧労働史学の歴史

野村 達朗\*

アメリカにおける労働者階級史研究には1960年代に大きな変革が生じた。労働史の内容は労働組合史を中心とする「労働運動史」から労働民衆の全体史へと拡大し、同時に研究の主な担い手が経済学者から歴史家へと転換した。筆者は基本的には「新労働史学」の立場から研究してきたが、「旧労働史学」の長い歴史が生み出してきた成果は極めて豊かであるとも考えている。本稿はアメリカ労働史学史の全体像を把握するための一つの作業として1950年代までの「旧労働史学」の展開を素描しようとするものである。

### I 19世紀における前史

#### (1) 新しい経済学の到来

チャーティスト運動、1848年革命など、労働運動の台頭で揺れた19世紀半ばのヨーロッパと比較する時、アメリカ合衆国は労働者階級の台頭による社会的動乱を免れているように思われた。「第二次アメリカ革命」とされることも

ある南北戦争に際しても、労働者は「階級の旗をかかげて」革命に参加したのではなかった。しかし1877年、南部再建が決着した直後、アメリカ資本主義は荒々しく台頭する新しい対抗勢力に直面した。連邦軍の武力によって鎮圧され、100人以上の死者を出した鉄道大ストライキは「晴天の霹靂」のようにアメリカ社会に甚大な衝撃を与えた。アメリカは本格的な労資抗争の時代に入ったのである。

しかし、アカデミズムの対応は遅れていた。当時の大学ではイギリス輸入の俗流化された古典経済学が支配的であり、学生たちは次のように教えられていた。富の不平等が進歩への刺激を生み出す。競争は「最大多数の最大幸福」を実現するための唯一の方法である。賃金は仕事を求めて競争する労働者の数に依存する。労働者全体に支払われる「賃金基金」は一定であり、ストライキは賃金の総額を増大させることは出来ず、労働者の団結は労働者全体にとって何の効果をもたない有害無益な行動でしかない。しかし若い経済学者たちの間に、ドイツに留学して歴史学派経済学を学び知ろうという気運が高まつた。ドイツが選ばれた理由の一つにはイギリスに対して後発国家としてドイツと同じ立場にあるというアメリカの事情があつたが、同時に社会問題の深刻化、労働運動の高揚に対応してドイツの経済学が社会政策の必要性を唱え

\*野村 達郎 (Tatsuro NOMURA) : 愛知学院大学文学部教授。愛知県立大学名誉教授。九州大学大学院文学研究科博士課程（西洋史学）修了。『フロンティアと摩天楼』講談社現代新書、1989年；『「民族」で読むアメリカ』講談社現代新書、1992年；『ユダヤ移民のニューヨーク』山川出版社、1995年；『大陸国家アメリカの展開』山川出版社、1996年；編著『アメリカ合衆国の歴史』ミネルヴァ書房、1998年；共訳ハーバート・ガットマン著『金ぴか時代のアメリカ』平凡社、1986年など。  
tatsnomu@dpc.aichi-gakuin.ac.jp

ていたからでもあった<sup>1)</sup>。

### （2）リチャード・T・イリー（1854-1943）

1885 年にアメリカ経済学会が創設されるが、この動きの中心人物だったリチャード・T・イリーこそ、アメリカのアカデミズムにおける労働史研究の道を切り開いた人物だった。ドイツ留学により歴史学派経済学を摂取し、ヨーロッパの労働運動・社会主義運動を観察して帰国したイリーはジョンズ・ホプキンズ大学で教えた。彼は傑出した改革主義者であり、多様な社会・経済問題について膨大な著作を著したが、1886 年の著書『アメリカにおける労働運動』(1886)<sup>2)</sup>はアメリカ労働運動についてのアカデミックな研究の開始を示す画期的な著書であった。1892 年彼はウィスコンシン大学に移った。

### （3）労働問題に关心を寄せた他の学者たち

その他にも 19 世紀末・20 世紀初頭には様々な学者たちが労働問題に关心を寄せた。マサチューセッツ州労働統計局長、合衆国労働局長などを歴任したキャロル・D・ライト、アメリカ経済学会初代会長のフランシス・A・ウォーカー、コロンビア大学のリチャード・スマス、コーネル大学やシカゴ大学で教えたロバート・ホクシーなどであり、ジョンズ・ホプキンズ大学ヒシカゴ大学では 1900 年から、コロンビア大学では 1901 年から、コーネル大学では 1904

<sup>1)</sup> Paul J. McNulty, "Labor Problems and Labor Economics: The Roots of an Academic Discipline," *Labor History*, Vol. 9, No.2, Spring 1968, pp. 243-246.

<sup>2)</sup> McNulty, "Labor Problems," pp. 249 - 252; Philip Taft, "A Rereading of Selig Perlman's 'A Theory of the Labor Movement,'" *Industrial and Labor Relations Review*, Vol. 4, No. 1, October 1950, p. 70; Mark Perlman, *Labor Union Theories in America: Background and Development*, Evanston, Ill., 1958; Westport, Conn., 1976 reprint, p.55; Richard T. Ely, *The Labor Movement in America*, New York, 1886.

年から労働問題についての授業コースが開設された<sup>3)</sup>。

## II ジョン・R・コモンズ（1862-1945）

### （1）彼の経歴と思想

ウィスコンシン大学がアメリカの労働問題・労働史学研究の最大の中心となるのはイリーの弟子、ジョン・R・コモンズの活動によってである。オバーリン大学在学中にヘンリー・ジョージの『進歩と貧困』を読み、社会改革思想に目覚めたコモンズは、1888～1890 年の 2 年間ジョンズ・ホプキンズ大学でイリーの下で学んだ。その後、彼は幾つかの大学（1890 年ウェズレイン大学、1891 年オバーリン大学、1892～95 年インディアナ大学、1895～99 年シラキューズ大学）で教職に就いたが、それぞれ短期間で離職した。彼の「ラディカリズム」が嫌われたからである。シラキューズ大学での採用の際の面接で、彼は自分が「社会主義者、单一税論者、銀貨自由鑄造論者、グリーンバック主義者、公益事業の都市所有論者」であると述べたという。コモンズは恩師イリーに招かれて、1904 年ウィスコンシン大学に落ち着くことが出来たのである。

彼は強い改革意識を抱いていた。彼は「50 年間第三政党に投票」したことを自慢した。彼はウィスコンシン州の改革立法の作成に重要な役割を演じた。全国的には彼は「アメリカ労働立法協会」の創設者となり、「合衆国産業関係委員会」の委員、「全国消費者連盟」の会長などを勤め、幅広く活動した。しかしその改革主義は基本的には保守的なものだった。彼はウィスコンシンに赴く前には労資双方のトップ指導者たちによる労資協調運動の組織、全国市民連盟の全国書記のラルフ・イーズリーの助手として働いた。イーズリーとの関係は長く続き、彼はイ

<sup>3)</sup> McNulty, "Labor Problems," pp. 246, 249-254.

ーズリーの影響力を通じて幾つもの全国的調査委員会に任命された。こうして彼はAFLとゴンバース支持、労資協調の方向に動いたのである<sup>4)</sup>。

## （2）労働史の史料収集

コモンズの研究活動は労働問題に限定されず、アメリカを代表する制度学派経済学者として多岐にわたったが、ここで最も重要なのは、彼がウィスコンシンにおいて多数の有能な労働史研究者を養成し、同大学をアメリカにおける労働問題、労働史研究のメッカたらしめたことだった。本格的な労働史研究を展開するためにはまず史料の収集が必要だった。イリーはジョンズ・ホプキンズ時代から労働運動に関する文書収集を開始したが、史料は次第に膨大なものとなり、ウィスコンシン歴史協会に所蔵されるようになった。そしてイリーは3万ドルにおよぶ基金を集め、収集の指揮をコモンズに委ねたのである。

コモンズは弟子のU・B・フィリップス、J・B・アンドリューズ、ヘレン・サムナーの協力を得て、収集活動が本格的に開始された。彼らは国内の多くの図書館、労働団体、雇主団体などを訪問し、史料の収集、書写にあたった。プランテーションの記録、労働組合の報告書や議事録、産業委員会報告書、労働関係の書籍、パンフレット、新聞・雑誌、運動指導者や団体のファイルが購入や交換により獲得された。ここにウィスコンシン歴史協会がアメリカ労働史に

関する最大の文書所蔵所になる基礎が築かれたのである<sup>5)</sup>。この努力に基づいてコモンズらは1910~11年にアメリカ労働史に関する記念碑的史料集、ジョン・R・コモンズ他編『アメリカ産業社会史料集』全11巻（1910-11）を出版した。このうちの最初の2巻はプランテーションおよびフロンティアを扱ったものであるが、その後の巻は労働運動史の史料に当たられている<sup>6)</sup>。

## （3）コモンズその他『合衆国労働史』（全4巻）

その上でコモンズは弟子たちを指揮してアメリカ労働運動の基本史を書くことに着手した。その成果が『合衆国労働史』（全4巻、1918-35）<sup>7)</sup>である。第1巻と2巻は1918年に刊行され、第1巻は植民地時代から南北戦争直前まで、第2巻は1850年代から1896年までを扱っている。第3、第4巻は1935年に出版され、第3巻は労働条件や労働立法を扱い、第4巻はセリーグ・パールマンとフィリップ・タフトによって1896~1932年の労働運動が説明されている。本書は長期にわたるアメリカ労働史の基本構造を説明した最初の本格的通史となった。コモンズは序文を書いているにすぎないが、弟子たちはコモンズの説明パターンを採用したのである。

彼らによればアメリカの組合は社会主義的意味では階級意識的ではなく、「賃金意識的」なのであり、ゴンバースの保守的な労働組合主義こそアメリカ労働運動に内在した傾向の論理的頂

<sup>4)</sup> Gary M.Fink,ed., *Biographical Dictionary of American Labor*, Westport, Conn., 1984, pp.161-162; Chester A. Morgan, *Labor Economics*, Homewood, Ill., 1962, pp. 329-331; Maurice Isserman, "God Bless Our American Institutions: The Labor History of John R. Commons," *Labor History*, Vol. 17, No.3, Summer 1976, pp. 309-310, 314; McNulty, "Labor Problems," pp. 255-256; John R. Commons, *Myself*, New York, 1934, pp. 7-22, 61, 81-84.

<sup>5)</sup> F.Gerald Ham, "Labor Manuscripts in the State Historical Society of Wisconsin," *Labor History*, Vol.7, No.3, Fall 1966, pp. 313-316; Philip Taft, "Rereading," p.71; Isserman, "God Bless," p. 321.

<sup>6)</sup> John R.Commons et al., eds., *A Documentary History of American Industrial Society*, 11 vols., Cleveland, 1910-11.

<sup>7)</sup> John R. Commons et al., *History of Labour in the United States*, 4 vols., New York, 1918-35.

点であり、社会主義や IWW のようなラディカルな運動は逸脱であった。彼らの師、コモンズはゴンパーズが死ぬ時に述べたと言われる言葉、「神よ、わがアメリカの制度を祝福し給え」を大きな尊敬の念を込めて引用した。M・イッサーマンによれば、「社会主義的知識人に対する明白な挑戦を含まないコモンズの本や論文は稀」であり、コモンズはゴンパーズの個人的友人であり、労働者を「純粋単純」労働組合主義から逸脱させようとするいかなる運動にも反対したのである<sup>8)</sup>。

#### （4）コモンズのアメリカ労働運動史解釈

コモンズは『合衆国労働史』の序文においてアメリカ労働運動の性格形成に寄与した 6 つの環境的要因を列挙した。第 1 はアメリカにおける自由地の存在であり、第 2 はアメリカの労働者が選挙権獲得のための政治闘争を必要としなかったこと、第 3 は州毎に法律が異なるアメリカの連邦制度、第 4 は移民の流入であり、労働者の間の民族意識が階級意識を弱いものにしたことだった。第 5 に彼はアメリカの景気循環の激しさを挙げた。アメリカの労働運動は好況期における勢力増大と不況期における解体を繰り返し、また運動の性格も景気変動によって左右された。そして第 6 に彼は市場の急速な拡大を挙げた<sup>9)</sup>。

彼はイリーを通じて学んだドイツ歴史学派の市場拡大の理論を労働運動史の理論的枠組みと考え、それを「アメリカ靴工、1648-1895 年—産業発展素描」(1909)<sup>10)</sup>で展開した。植

民地時代の靴工たちは独立的職人であり、1648 年にギルド的な最初の保護団体を作ったが、靴の市場が拡大するとともに生産組織上の変化が生じ、18 世紀末には「労資間の原初的なアメリカの調和」が破壊され、靴職人たちは職人団体を結成した。そして 19 世紀前半における靴工業の変化も外部的諸要因、つまり市場およびそれに伴う信用制度の拡大の結果として出てきたとコモンズは考えた。労働者組織の変化を市場の拡大という「外的」要因から説明するという彼のアイディアは生産技術、生産力の発展が社会関係を変化させると考えるマルクス主義的解釈に対抗するものであった<sup>11)</sup>。

#### （5）ビジネス・ユニオニズムの樹立過程

『合衆国労働史』を貫く路線は、「3 世紀の経過の間に、如何にして賃金労働者が明確な階級として、農民、商人、雇主から徐々に自らを分離し、社会における彼の地位と前進が直接に賃金に依拠しており、価格、地代、利潤、または利子に依拠しているのではないということを感じるようになるのか」ということであり、そのように感じた労働者の中から形成される運動の形態がビジネス・ユニオニズムだという主張であった。このプロセスを第 2 卷の中でイデオロギー分析を通じて明らかにしようとしたのがセリーヴ・パールマンだった。彼はドイツ系移民によってアメリカに伝えられた社会主義運動内部において、経済行動を重視するマルクス派と政治行動を唱えるラサール派との間の論争などの詳細な分析を通じて、マルクス派理論の吸収がやがては「純粋単純」組合主義へと導かれていく道筋を説明した。換言すればマルクス派理論の吸収を契機に、アメリカ労働運動は労働騎

<sup>8)</sup> Isserman, "God Bless," p. 310.

<sup>9)</sup> Commons, "Introduction," *History of Labour in the United States*, Vol. I, New York, 1918, pp. 4-5.

<sup>10)</sup> John R. Commons, "American Shoemakers, 1648-1895: A Sketch of Industrial Evolution," *Quarterly Journal of Economics*, Vol. 24, November 1909.

<sup>11)</sup> Isserman, "God Bless," p. 323-325; Taft, "Rereading," pp. 71-72; Philip Taft, "A Theory of the American Labor Movement," in Gerald D. Nash, ed., *Issues in American Economic History*,

士団の段階までの運動を色濃く染めていた小生産者のイデオロギーを克服したというのである<sup>12)</sup>。

### III セリーグ・パールマンと『労働運動の理論』

#### (1) パールマン（1888-1959）の経歴

コモンズの下で学び、彼の後継者となったセリーグ・パールマンは、「全ての地域および時代に適用されるような労働運動の一般理論」を考察し、1928年に『労働運動の理論』<sup>13)</sup>を刊行した。彼はロシア領ポーランドに生まれたユダヤ人であり、青年時代はマルクス主義を信奉し、いわゆるブンド（リトアニア・ポーランド・ロシア・ユダヤ人労働総同盟）に加わって革命運動に従事した。その後、医学の勉強をするために、イタリアに赴いたが、そこで合衆国への旅を決心し、1908年にウィスコンシン大学に入った。彼はコモンズに可愛がられ、1919年に同大学の教員スタッフに採用されたのだった<sup>14)</sup>。

#### (2) パールマンの『労働運動の理論』

パールマンによれば、各国労働運動の性格は

---

Lexington, Mass., 1964, p. 396.

<sup>12)</sup> *History of Labour in the United States*, Vol. II のなかでの Selig Perlman 執筆部分, Part VI "Upheaval and Reorganization," pp. 195-537; John R. Commons, "Karl Marx and Samuel Gompers," *Political Science Quarterly*, Vol. 41, 1926, pp. 281-86; Taft, "Rereading," p. 72; Thomas A. Krueger, "American Labor Historiography, Old and New," *Journal of Social History*, Vol. 4, No. 3, Spring 1971, pp. 277-278.

<sup>13)</sup> Selig Perlman, *A Theory of the Labor Movement*, New York, 1928. (松井七郎訳『労働運動の理論』法政大学出版局, 1954年)

<sup>14)</sup> Morgan, "Labor Problems," p. 333-334; Fink, ed., *Biographical Dictionary*, p. 458; Robert H. Zieger, "Workers and Scholars: Recent Trends in American Labor Historiography," *Labor History*, Vol. 13, No. 2, Spring 1972, p. 249; Mark Perlman, "Labor Movement Theories: Past, Present, and Future," *Industrial and Labor Relations Review*, Vol. 13, No. 3, April 1960, pp. 342-346.

次の3つの中心的要因によって規定されている。①労働運動に対する資本主義の抵抗力、②知識人のメンタリティが労働運動に対して及ぼす影響力、そして③労働組合メンタリティの成熟度である。彼は組織労働者のメンタリティと知識人のメンタリティとの間には基本的な矛盾が存在するという認識から出発した。「現代社会における反資本主義的影響が発するのは知識人からである」と彼は述べた。知識人は広範な社会的変革を構想し、労働運動に対して進むべき道を示そうとする。彼らは一般に資本主義の抵抗力を過小評価し、急進的変革への労働者の願望を過大評価する。彼らの支配が浸透しているところでは、労働運動は革命的性格を帯び、賃金や労働条件の改善という短期的で実際的な目標よりも社会主義、アナキズム、共産主義といった長期的なイデオロギー的目標を採用する。資本主義の抵抗力とは支配集団として反対集団の革命的攻撃をねのけて生き残る資本家の雇用者たちの能力を意味する。その力は社会の諸構成要素、特に労働者階級が私有財産制その他の資本主義の基礎的な原則を受け入れているところでは強くなる。労働者集団は長期的かつイデオロギー的な目標を避け、職業意識的指向に立ち、団体交渉を通じて労働者の経済的地位の具体的改善を計ろうとする。知識人とはメンタリティが異なるのである。

このような両メンタリティの相違の認識の上に彼は次のように論じた。資本主義の抵抗力が弱く、労働者の間に強い革命的傾向がある諸国では、急進的知識人の強い影響の下に労働運動は政治的・革命的方向に動いていく。ロシア革命の時期に示されたように、ロシアでは資本主義の抵抗力が弱く、労働運動の方向選択は労働者階級自体ではなく、知識人によって労働運動の中に持ち込まれた。これに対して、アメリカのように資本主義の抵抗力が強く、私有財産観念が広く浸透しているところでは、知識人

のメンタリティは労働運動を支配することに失敗し、労働運動は一般労働者の必要と願望に基づいて発展し、労働組合メンタリティが高い成熟度を達成した。これがアメリカの幸運な経験であった。こうして彼はアメリカにおいては純粹単純組合主義というプラグマティックで非革命的な労働組合運動が主流としての地位を確立するのは当然だったと結論したのである<sup>15)</sup>。

### （3）レーニン主義との対比

このようなパールマンの議論はレーニンの『何をなすべきか？』（1902年）とその前提において共通している。レーニンは書いた。「われわれはいま、労働者は社会民主主義的意識をもっているはずもなかった」と言った。この意識は外部からしかもたらしえないものだった。労働者階級がまったく自分の力だけでは、組合主義的意識、すなわち組合に団結し、雇い主と闘争を行い、労働者に必要なあれこれの法律を政府に発布させる等々のことが必要だという確信しかつくりあげえないことは、全ての国の歴史の立証するところである。他方、社会主義の学説は、有産階級の教養ある代表者であるインテリゲンツィアによって仕上げられた哲学、歴史学、経済学上の諸理論のうちから成長したものである<sup>16)</sup>。」

社会主義的階級意識は労働運動の外部からしかもたらしえないという認識こそ、前衛政党論

に連なっていくレーニン主義の出発点であった。パールマンも同じ認識から出発した。両者の違いは、レーニンが積極的な「外部からの持ち込み」の必要性を力説したのに対して、パールマンは外部からのイデオロギー的注入なしに、労働者自身の願望から発した運動の形態としてビジネス・ユニオニズムを祝福したことにある。

## IV ウィスコンシン学派以外の労働史研究

### （1）ジョンズ・ホプキンズ学派

アメリカ労働史研究におけるウィスコンシン学派の影響は絶大なものがあった。1971年トマス・クルーガーは述べた。「コモンズの知的継承者たちは全国の産業関係研究所のスタッフとなり、大学院で労働問題を教え、事実上『レイバー・ヒストリー』誌の貢を独占している。今日までのところ、アメリカ労働史はウィスコンシン史家たちの作業に対する拡大された脚注および付録以上のものではほとんどなかった」<sup>17)</sup>。

しかしアメリカ労働史研究はウィスコンシン学派によって独占されたのではなかった。ウィスコンシン学派と並んで早期から労働問題研究に取り組んだのが、ジョージ・バーネットとJ・ホランダー両教授が育てたジョンズ・ホプキンズ学派だった。デイヴィッド・マッケイヴ、セオドア・W・グロッカー、フランク・T・ストックトンなど、両教授のセミナーで学んだ多くの学生たちは労働組合の規約と細則、大会議事録、機関紙などを分析して博士論文を作成し、その成果をジョンズ・ホプキンズ大学出版局から出版した。後に有名となるレオ・ウォルマン、サムナー・スリクター、ロイド・アルマンなどもこの学派に属する。ウィスコンシン学派が労働組合の「歴史」を描いたのに対して、彼らは労働組合についての経済的・経済史的分析を行

<sup>15)</sup> Morgan, *Labor Economics*, pp. 333 - 335; Charles A. Gulick and Melvin K. Bers, "Insight and Illusion in Prelman's Theory of the Labor Movement," *Industrial and Labor Relations Reviews*, Vol. 6, No. 4, July 1953, pp. 510-531; Adolph Sturthal, "Comments on Selig Perlman's A Theory of the Labor Movement," *Industrial and Labor Relations Review*, Vol. 4, No. 4, July 1951, pp. 483-491; Philip Taft, "A Rereading," pp. 70-77; Philip Taft, "A Theory of the American Labor Movement," pp. 395-400.

<sup>16)</sup> レーニン（日本共産党中央委員会労働組合部編）『労働組合—理論と運動—』上巻、大月書店、1970年、75頁。

<sup>17)</sup> Thomas Krueger, "American Labor Historiography," p. 277.

ない、ウィスコンシン学派があまり触れなかつた労働組合の多様な局面を明らかにしたのである<sup>18)</sup>。

### （2）ロバート・ホクシーとカールトン・パークー

コロンビア大学で教えた制度学派経済学者、ロバート・ホクシーは『合衆国における労働組合運動』<sup>19)</sup>においてアメリカにおける組合運動をビジネス組合主義、向上組合主義、革命的組合主義、掠奪的組合主義、依存的組合主義の5タイプに分類した。ビジネス・ユニオニズムという言葉を広く流通させたのは彼だったと言われる。向上組合主義とは国際婦人服労組のように理想主義的観点をもち、組合員の文化的レベルを引き上げようとした組合主義であり、革命的組合主義の重要な代表はIWWであった。掠奪的組合主義とは腐敗した指導部が「強請り」によって組合員を餌食にする組合主義であり、依存的組合主義は「会社組合」のことである。ホクシーは実際の組合はこのような諸形態を混合した形で存在していると論じたのだった<sup>20)</sup>。

日雇い移動労働者などについての研究でも知られるカールトン・パークーは、労働組合を産業における労働者の心理的不適合と関連づけて説明し、労働運動についての心理学的理論を発展させた<sup>21)</sup>。また1920年代以来産業社会学や

心理学的調査が進展し、労働運動についての理解を助けた。「ホーソン実験」で知られるジョージ・エルトン・メーヨーの貢献は良く知られている。

### （3）左翼的労働史研究

ビジネス・ユニオニズムを擁護するウィスコンシン学派その他のアメリカ労働史研究の主流の他に、マルクス主義の影響を強く受けたラディカル派の研究者たちの流れがあった。社会主义運動が主としてドイツ系移民に限定されていた段階での重要な著作としては、マルクスの娘婿と娘、エドワード・エイヴリングとエリザベス・マルクス・エイヴリングがアメリカでの実地調査に基づいて書いた『アメリカの労働者階級運動』(1891)、エンゲルスらの親友だったフリードリヒ・ゾルゲの『植民地時代から1890年にいたる労働者階級の歴史』、ヘルマン・シュリューターによる『アメリカの醸造産業と醸造労働者』(1910)、そして南北戦争をめぐるリンカンと労働者の問題を論じた著書、『リンカンと奴隸制』(1913)などが注目される<sup>22)</sup>。

20世紀初頭のアメリカ社会党にはアメリカ生まれの者を含めて多くの知識人が参加し、幾多の人々が労働問題に関する著作を書いた。その中で労働史に関するものとしては、モ里斯・ヒルキット『合衆国社会主義の歴史』(1908)がアメリカ社会主義運動史の通史として正確な事実を述べた信頼できる書物である。またジェ

<sup>18)</sup> Walter Galenson, "Reflections on the Writing of Labor History," *Industrial and Labor Relations Review*, Vol. 11, No. 1, October 1957, p. 86; Vaughn Davis Bornet, "The New Labor History: A Challenge for American Historians," *The Historian*, Vol. 18, No. 1, Autumn 1955, p. 14; Gerald N. Grob, *Workers and Utopia*, Evanston, Ill., 1961, pp. 200-202; Taft, "Rereading," p. 73.

<sup>19)</sup> Robert Hoxie, *Trade Unionism in the United States*, New York, 1917.

<sup>20)</sup> Morgan, *Labor Economics*, pp. 326-328; McNulty, "Labor Problems," pp. 254-255; Taft, "Rereading," p. 73; Mark Perlman, *Labor Union Theories*, pp. 128-138.

<sup>21)</sup> Morgan, *Labor Economics*, pp. 335-336;

Carlton Parker, *The Casual Laborer and Other Essays*, New York, 1920.

<sup>22)</sup> Edward Aveling and Eleanor Marx Aveling, *The Working-Class Movement in America*, 2d ed., London, 1891; Friedrich Sorge, *A History of the Working Class from Colonial Times to 1890*, ed. by P. S. Foner and B. Chamberlain, Westport, Conn., 1977; Hermann Schleuter, *The Brewing Industry and the Brewery Workers' Movement in America*, Cincinnati, 1910; Schleuter, *Lincoln, Labor and Slavery*, New York, 1913.

ームズ・オニールは『アメリカ史における労働者』(1910)を著し、アメリカ社会党に所属した代表的な知識人としてのアルジー・M・サイモンズは、歴史書『アメリカ史における社会的力』(1911)を書いた。1920年代の著作としては社会党右派的立場にたつネイサン・ファイン『合衆国における農民・労働者政党』(1928)が重要な著作である。共産党的立場からのアンソニー・ビンバ『アメリカ労働者階級の歴史』(1928)は「アメリカにおいてプロレタリア革命は不可避である」という言葉で終わっているが、良く読まれた本と言えよう<sup>23)</sup>。

#### (4) タンネンバウム

1920年代に出された労働運動に関する特異な著作としてフランク・タンネンバウム『労働運動』(1921)がある。タンネンバウムはオーストリア生まれで、1905年にアメリカに移住し、青年時代にはIWWでかなりの活動を行い、投獄された経験を持ったが、後に歴史家に転じ、コロンビア大学で教え、ラテンアメリカとアメリカ合衆国との奴隸制比較研究でも注目されるようになるが、労働運動に関する研究でも独自の議論を展開した。

彼は集団間抗争を社会進歩の主要源泉として歓迎し、全ての労働者組織を「思想においてではないとしても事実において革命的」として眺めた。彼によれば、労働者は工場制度の拡大によって転落し、労働市場の中での決定権を喪失

<sup>23)</sup> Morris Hillquit, *History of Socialism in the United States*, New York, 1908; James Oneal, *The Workers in American History*, St. Louis, 1910; Algie M. Simons, *Social Forces in American History*, 1911; Nathan Fine, *Farmer and Labor Parties in the United States, 1828-1928*, New York, 1928; Anthony Bimba, *The History of the American Working Class*, New York, 1928; Paul Buhle, "American Marxist Historiography, 1900-1940," *Radical America*, Vol. 4, No. 8-9, November 1970, pp. 5-35; Zieger, "Workers and Scholars," pp. 248-249.

し、不安感に襲われ、労働組合に「所属」することを求める。労働組合は労働者の「決定権」を拡大しようと試みるが、それは雇主の利害に敵対するものであり、潜在的に組合は革命的性格を持っていると彼は考えた。後に彼は考えを変えるが、1920年代初頭の彼は組合が究極的には産業の支配権を奪取し産業を運営することを願った。やはりタンネンバウムはIWW活動を背景に労働運動の理論を考えたのである<sup>24)</sup>。

#### (5) ノーマン・ウェア (1886-1949)

アメリカ労働史研究のなかで、ウィスコンシン学派に対する有力な反論を展開したのが、ウェズレイ大学の経済学教授、ノーマン・ウェアだった。マーク・パールマンによれば、彼は「社会党右派の立場からの総合的評価」を提供したのだった。彼の『産業労働者、1840~1860年』(1924)は、南北戦争以前の時期の労働史として評価が高い。労働者の生活は1837年恐慌を契機に大きく変わった。生産様式の変化が重大な要因だったとウェアは考えた。工場制度の発展が労働者の経済的地位を変えた。工場所有者が有利な立場に立ち、かつての半独立的な職人は従属性を強めたというのである。

彼の『合衆国の労働運動、1860~1895年』(1929)では、機械化の進展が職能別の区別の意義を低下させたのだから、職能別組合主義にたつAFLの諸組合は時代遅れであり、全労働者の連帯を強調し、労働者を包括的に組織しようとした労働騎士団のほうが産業革命の教訓を認識していたのだと彼は解釈した。階級的連帯こそ、生産方法の変化への対応であるべきだったのに、ゴンバーズらは少数の熟練労働者の

<sup>24)</sup> Morgan, *Labor Economics*, pp.331-333; David Montgomery, "Conventional Wisdom," *Labor History*, Vol. 13, No.1, Winter 1972, pp. 128-129; Mark Perlman, *Labor Union Theories*, pp. 138-142; Frank Tannenbaum, *The Labor Movement*, New York, 1921.

職能別組合に依拠することによって、アメリカ労働者全般を裏切ったのだというのが、ウェアの見解だった。しかしながら1920年代までは、労働史研究におけるウィスコンシン学派、さらにはビジネス・ユニオニズム擁護論の優越性は揺るがなかったのである<sup>25)</sup>。

## V 1930年代～1950年代の労働史研究の隆盛

### (1) 労働運動の大高揚と研究者の共感

いうまでもなく、激動の1930年代はアメリカ労働史研究に新時代を開いた。多くの知識人が労働運動に共感を寄せた。ルイス・フィラードは言う。「当時労働運動は単なる利害ではなく、人類の声を以て語ると主張した。ピケットにたつスト工は中産階級的聴衆に向かって彼らの傷口と欲求を打ち明けた。闘う殉教者たちに対して投票や資金による支援を拒む者は冷笑家か自分本位の者だけだった。」労働問題についての著作には需要があり、エドワード・レヴィンソン、ハーバート・ハリス、ベンジャミン・ストルバーグ、J・R・ウォルシュ、ロバート・R・R・ブルックスなどの著作が広い読者を得た<sup>26)</sup>。

### (2) 著作の傾向—1930年代を中心に

労働史研究にマルクス主義の影響が広がった。

<sup>25)</sup> Mark Perlman, *Labor Union Theories*, pp. 107-110; Taft, "Rereading," p. 73; Norman Ware, *The Industrial Worker, 1840-1860: The Reaction of American Industrial Society to the Advance of the Industrial Revolution*, Boston, 1924; Norman Ware, *The Labor Movement in the United States, 1860-1895*, New York, 1929.

<sup>26)</sup> Louis Filler, "Introduction" to Bernard Mandel, *Samuel Gompers: A Biography*, Yellow Spring, O., 1963, p. xiii; Edward Levinson, *Labor on the March*, New York, 1938; Herbert Harris, *American Labor*, New Haven, Conn., 1938; Benjamin Stolberg, *The Story of the CIO*, New York, 1938; J. R. Walsh, *CIO: Industrial Unionism in Action*, New York, 1937; Robert R. Brooks, *When Labor Organizes*, New Haven, 1937.

AFL指導部に対する批判が高まった。共産党的路線に沿う幾多の著作が出版された。サミュエル・イエレン『アメリカの労働者闘争』(1936)は労働者の戦闘性を歌い上げた。多くの知識人がAFLを非難し、CIOを支持した。ブルース・ミントンとジョン・スチュアートによる『労働者を導く者たち』(1937)はAFL会長ウィリアム・グリーンを「アメリカ労働者の裏切り者」として描いた。AFL擁護の立場は批判されるようになった。研究者たちは胸がわくわくするような興奮を呼び起こすような新しい時代に目を向けることが多く、労働運動の前進、ニューディールと労働運動との関係が注目を浴びた<sup>27)</sup>。

また各産業毎の個別組合についての研究が進展した。「産業研究」と呼ばれた分野である。炭鉱業におけるマックアリスター・コールマンの『人と石炭』(1943), 鉄鋼産業についてのロバート・R・R・ブルックス『鉄鋼は進む』(1937), 織工業についてのハーバート・J・レーン『綿工場労働者』(1944), 衣服産業についてのベンジャミン・ストルバーグ『仕立工の前進』(1944), ジョウエル・サイドマン『被服産業』(1942), 材木産業についてのヴァーノン・H・ジェンセン『材木と労働者』(1945), 農業労働に関するスチュアート・ジエイミソン『アメリカ農業における労働組合運動』(1945), ゴム労働者についてのハロルド・S・ロバーツ『ゴム労働者』(1944)などが刊行された<sup>28)</sup>。

<sup>27)</sup> Samuel Yellen, *American Labor Struggles, 1877-1934*, New York, 1936; Bruce Minton and John Stuart, *Men Who Lead Labor*, New York, 1937.

<sup>28)</sup> McAlister Coleman, *Men and Coal*, New York, 1943; Robert R. Brooks, *As Steel Goes*, New Haven, 1937; Herbert J. Lahne, *The Cotton Mill Worker*, New York, 1944; Benjamin Stolberg, *Tailor's Progress*, Garden City, N. Y., 1944; Joel Seidman, *The Needle Trades*, New York, 1942; Vernon H. Jensen, *Lumber and Labor*, New York,

労働運動史全体について良く知られている著書としては、レオ・ウォルマン『労働組合運動の盛衰』(1936)、ルイス・ローウィン『アメリカ労働総同盟』(1933)などが出た。労働経済学の概説書としてはハリー・A・ミリスとロイヤル・モンゴメリー『労働経済学』全3巻(1938-45)、サムナー・スリクター『組合政策と産業経営』(1941)などが良く読まれた<sup>29)</sup>。

### (3) 1950年代を中心に

1950年代には労働運動は AFL と CIO の合同を実現し、ビッグ・ガヴァメント、ビッグ・ビジネスと鼎立するビッグ・レイバーの地位を得た。組合は多数のメンバー数を誇り、基幹産業の大部分の労働者が組織され、労働条件は団体交渉によって定められるようになった。大学で労働問題に関する授業が広がり、労働研究所が設置され、大学で育った専門家が企業や巨大化した労働組合によって雇用されるようになった。労働問題についての大量の著書や論文が生産されるようになった。

1930年代に引き続いて、特定の産業の組合の歴史、その制度的発展を扱った著作が続出した。特に組合史のモデルとして好評を得たのが職能別組合の代表的組合としての大工組合を扱ったロバート・クリスティー『木材の王国』(1956)である。その他、定評のある研究としては非鉄金属産業の労働運動についてのヴァーノン・H・ジェンセン『抗争の遺産』(1956)，

---

1945; Stuart Jamieson, *Labor Unionism in American Agriculture*, Washington, D. C., 1945; Harold S. Roberts, *The Rubber Workers*, New York, 1944.

<sup>29)</sup> Galenson, "Reflections," pp. 87 - 91; Leo Wolman, *Ebb and Flow in Trade Unions*, New York, 1936; Lewis L. Lorwin, *The American Federation of Labor: History, Policies, and Prospect*, Washington, D. C., 1933; Harry A. Millis and Royal Montgomery, *The Economics of Labor*, 3 vols, New York, 1938-45; Sumner H. Slichter, *Union Policies and Industrial Management*, Washington, D. C., 1941.

炭鉱業についてのモートン・S・バラツ『組合と石炭産業』(1955)、電話産業についてのジャック・バーバッシュ『組合と電話』(1948)、船員についてのジョーゼフ・ゴールドバーグ『アメリカの船員』(1957)などが挙げられよう<sup>30)</sup>。

アメリカ労働運動史の概説書としてはオスラー・リー・ダレス『アメリカの労働運動』(1949)が版を重ねていくことになる。著者は本来は外交史家であるが、従兄のジョン・フォスター・ダレス国務長官と違って、1930年代の熱気のなかで育ったリベラル派の学者だったのである。その他、ジョーゼフ・レイバック『アメリカ労働運動の歴史』(1959)、イギリス人学者、ヘンリー・ペリングによる『アメリカ労働運動』(1960)もバランスのとれた説明を提供した。筆者はこれらの著書を通じて、アメリカ労働運動の概要を学び知ったのである。その他、AFL 内での産業別・職能別両組合主義の対立を扱ったジェームズ・O・モリス『AFL 内部の抗争』(1958)、AFL に対するCIO の挑戦を扱ったウォルター・ギャレンソン『AFLへのCIO の挑戦』(1960)、戦時から戦後の平時経済への転換と労働組合との関係を扱ったジョウエル・サイドマン『防衛から再転換期のアメリカ労働運動』(1953)、1950年代における労働運動の合同についてのアーサー・ゴールドバーグ『AFLとCIO の統合』(1956)、19世紀後期における全国労働組合の台頭を説明したロイド・アルマン『全国労働組合の台頭』(1955)などが特に知られている。ニューディールと労働運動の関連についてはミ

---

<sup>30)</sup> Robert Christie, *Empire in Wood*, Ithaca, N. Y., 1956; Vernon H. Jensen, *Heritage of Conflict*, Ithaca, 1956; Morton S. Baratz, *The Union and the Coal Industry*, New Haven, 1955; Jack Barbash, *Unions and Telephones*, New York, 1948; Joseph Goldberg, *American Seamen*, Cambridge, Mass., 1957; Galenson, "Reflections," pp. 88-89; Morgan, *Labor Economics*, pp. 337.

ルトン・ダーバーとエドワイン・ヤング編『労働運動とニューディール』(1957)があり、邦訳された<sup>31)</sup>。

労働指導者の伝記も色々出た。優れたものとして定評があるのが、ジョナサン・グロスマン『ウィリアム・シルヴィス』(1945), ソウル・D・アリンスキー『ジョン・L・ルイス』(1949), そしてフランクリン・D・ルーズベルトとの密接な協力関係で知られるCIO指導者、シドニー・ヒルマンについてのマシュー・ジョーゼフソン『シドニー・ヒルマン—アメリカ労働運動の政治家』(1952)を挙げることが出来よう。特にヒルマン伝は大量の事実資料を基にして書かれたものであり、生き生きとした筆致で人を引きつける。この半世紀前の古典的名著が牧野陽一氏によって最近邦訳されたことは喜ばしいことである。また多数のアメリカ労働運動の指導者たちについてそれぞれ簡潔に説明したチャールズ・A・マディソン『アメリカの労働指導者たち』(1950)も良く読まれた。自動車労組のウォルター・ルーサーについてはアーヴィング・ハウとB・J・ウェイディックの『統一自動車労組とウォルター・ルーサー』(1949)が出た<sup>32)</sup>。

<sup>31)</sup> Foster Rhea Dulles, *Labor in America*, New York, 1949; Joseph Rayback, *A History of American Labor*, New York, 1959; Henry Pelling, *American Labor*, Chicago, 1960; James O. Morris, *Conflict within the AFL*, Ithaca, N.Y., 1958; Walter Galenson, *The CIO Challenge to the AFL*, Cambridge, Mass., 1960; Joel Seidman, *American Labor from Defense to Reconversion*, Chicago, 1953; Arthur J. Goldberg, *AFL-CIO: Labor United*, New York, 1956 (松井七郎・古米淑郎訳『労働運動の分裂と統一—AFL-CIOの成立—』好学社, 1965年); Lloyd Ulman, *The Rise of the National Trade Union*, Cambridge, Mass., 1955; Milton Derber and Edwin Young, eds., *Labor and the New Deal*, Madison, 1957 (永田正臣他訳『現代アメリカ労働運動史』日刊労働通信社, 1964年)。

<sup>32)</sup> Jonathan Grossman, *William Sylvis*, New York, 1945; Saul D. Alinsky, *John L. Lewis*, New York, 1949; Matthew Josephson, *Sidney Hillman*:

#### (4) 労働経済学

労働経済学についてはジャック・バーバッシュ『組合運動の実際』(1956)やC・R・ドーハティ『アメリカ産業の労働問題』(1944), リチャード・A・レスター『組合の成熟』(1958)などが良く知られている。労働組合理論の歴史に関してはセリーグ・パールマンの息子のマーク・パールマンが書いた『アメリカにおける労働組合理論』(1958)が優れた成果だった。実際に1950年代に労働運動研究は黄金時代を迎えたのである<sup>33)</sup>。

成熟期に達したアメリカ労働経済学、労働史学の全体的性格に関して、C・L・トムリンズは「産業多元主義」と名付け、次のように説明した。産業多元主義は労使間には利害の衝突が起こることを認めるが、両者の利害は基本的に対立するものではなく、抗争は管理され、調整され得るものという考えに基づいており、両者の調和を達成するためのメカニズムを創出しようとする。産業的安定が達成されるには、双方の側の責任あるリーダーシップが必要であり、組合運動から反資本主義的見解、特に共産主義は排除されねばならない。ストライキ権は維持されねばならないが、ストライキの実行は減少されるべきであり、また大組合による大きな交渉が効果的であると主張する<sup>34)</sup>。

*Statesman of American Labor*, Garden City, N.Y., 1952 (牧野陽一訳『シドニー・ヒルマン—アメリカ労働運動の先駆者／ニューディールをさえた男—』第一書林, 2002年); Charles A. Madison, *American Labor Leaders*, New York, 1950; Irving Howe and B. J. Widick, *The UAW and Walter Reuther*, New York, 1949.

<sup>33)</sup> Jack Barash, *The Practice of Unionism*, New York, 1956; C. R. Daugherty, *Labor Problems in American Industry*, Washington, 1944; Richard A. Lester, *As Unions Mature*, Princeton, 1958; Mark Perlman, *Labor Union Theories in America*, Evanston, Ill., 1958.

<sup>34)</sup> Christopher L. Tomlins, "New Directions in American labor History," *Labour History: A Journal of Labour and Social History*, No.43, November 1982, pp. 90-103; Morgan, *Labor*

G・W・ブルックスはこれを産業関係についてのホイッグ的コンセンサスと名付けた。アメリカ労働運動の歴史過程はそのようなコンセンサスに向かっての前進だったと考えるようなアメリカ労働史像である。ニューディール以後、この体制は大きく前進し、産業関係安定化のメカニズムが形成された。組合活動が広がれば広がるほど、産業的安定と民主主義の領域が広がる。このような見方が1950年代のコンセンサスになったというのである。ホイッグ的自由主義の歴史観の拡大という道筋で労働史を考えるのである<sup>35)</sup>。

## VI フィリップ・タフト（1902-76）

### （1）学者としての経歴と著作

産業多元主義的な労働史研究の中で聳えたつ存在だったのが、ウィスコンシン学派の巨頭、フィリップ・タフトであった。1902年生まれの彼は他の学生たちよりもかなり遅れて1928年にウィスコンシン大学に入った。1932年にタフトが学部を卒業すると、パールマンは大学院生の彼に全面的協力を要請した。1935年に発行された『合衆国労働史』第4巻はパールマンと大学院生タフトの共著だった。1935年に彼はウィスコンシンを離れ、2年間ワシントンにおけるニューディール機関で働き、1937年にブラウン大学の経済学部で教職に就き、1968年までそこで教えた。

彼が著した労働経済学の書物のうち重要なのは邦訳もある『労働組合—その組織と発展』

*Economics*, pp. 336-337.

<sup>35)</sup> George W. Brooks, "The Relevance of Labor History to Industrial Relations," *Industrial Relations Research Association Publications*, 28, Madiosn, 1962, p. 211. C.L.Tomlins, "New Directions," p. 90に引用。また「労働史におけるホウイッグ史観」については、「ハーバート・ガットマン」E・P・トムソン他(近藤和彦・野村達朗編訳)『歴史家たち』名古屋大学出版会, 1990年, 249-250頁。

(1954)<sup>36)</sup>である。労働組合における共産主義の影響、組合役員の選出、組合費・加入金、役員の俸給、組合内部の規律と統制などを説明し、特徴的な幾つもの組合が抱えている問題点を指摘するなど、本書の内容は多岐にわたっている。タフトは多くの組合指導者たちと親交を結び、労働組合の世界をいわば内側から見ることが出来た。歴史学者にはおよびもつかない技能の持ち主であった。

1949年タフトはAFLの調査を開始した。これが『ゴンバーズの時代のAFL』(1957)および『ゴンバーズの死から合同にいたるAFL』(1959)という2冊の記念碑的著作となつた<sup>37)</sup>。アメリカの指導的労働組合の立場と研究者としての自己の立場とを同一視するタフトはAFLの立場を全面的に擁護した。それは臆面もないほどのものだった。彼は移民制限およびアジア人排除についてのAFLの政策はアメリカの労働水準を保護する必要にのみ根ざしていたのだと説明し、未組織労働者を組織しなかつたことはそう願望したからではなく、資金が欠如していたからだったと説明した<sup>38)</sup>。

### （2）タフトのパールマン批判

しかしタフトのアメリカ労働史解釈において注目されるのは、ビジネス・ユニオニズムの解

<sup>36)</sup> Philip Taft, *The Structure and Government of Labor Unions*, Cambridge, Mass., 1954. (大河内一男・川田寿訳『労働組合—その組織と発展—』時事通信社, 1956年)

<sup>37)</sup> Philip Taft, *The A. F. of L. in the Time of Gompers*, New York, 1957; Taft, *The A. F. of L. from the Death of Gompers to the Merger*, New York, 1959.

<sup>38)</sup> David Brody, "Philip Taft: Labor Scholar," *Labor History*, Vol. 19, No. 1, Winter 1978, pp. 9-12; "Philip Taft, Member of the Faculty at Brown University," *Labor History*, Vol. 19, No. 1, Winter 1978, pp. 31-33; Penelope H. Thonberg, "Philip Taft, the Teacher," *Labor History*, Vol. 19, No. 1, Winter 1978, p. 28.

釈をめぐってパールマンとの間にかなり大きな違いがあったことである。『合衆国労働史』第2巻においてパールマンは、1880年代におけるAFLの結成とともにビジネス・ユニオニズムへの決定的転換が起こったとし、それをドイツ系社会主義者の間のイデオロギー論争との関係から説明した。つまりパールマンはビジネス・ユニオニズムを当時の労働指導者たちが作ったものだと主張したのである。しかしタフトによれば、アメリカの労働組合の特徴としてのビジネス・ユニオニズムは18世紀末の職人の最初の時期の団体行動にまで遡るものであり、アメリカの労働組合はいつでも賃金および雇用条件の改善に关心を寄せてきた。ビジネス・ユニオニズムは労働者の現実的願望から自発的に起きたものであり、ゴンバーズやA・ストラッサーはそれまでアメリカ労働者によって発展させてきた伝統の真の継承者として位置付けられるべきだというのである<sup>39)</sup>。

### （3）肉体労働者体験とIWW

1960年代以降、彼はその研究の領域を幾らか広げた。そのうちの1冊、『アメリカ史における労働者』（1964）は、その題名にもかかわらず、やはり狭義の「労働組合運動史」である。タフトは制度学派的枠組みを出ることはなかつたのである。しかし注目されるのは彼がIWWについての優れた論文を『レイバー・ヒストリー』誌に3点寄せたことである<sup>40)</sup>。筆者はAFLの強烈な擁護者タフトがなぜIWWに关心を寄せるのかを不思議に思ったが、1974～75年にデトロイトのウェイン・ステート大学の労

<sup>39)</sup> Taft, "Reflections on Selig Perlman," *Industrial and Labor Relations Review*, Vol. 29, January 1976, pp. 250, 256; Taft, "On the Origins of Business Unionism," *Industrial and Labor Relations Review*, Vol. 17, No. 1, October 1963, pp. 20-38.

<sup>40)</sup> Philip Taft, *Organized Labor in American*

労史文書館で過ごした時、彼がIWWの活動家だったという「秘密」を教えられた。そして大部分のアメリカ労働史研究者たちは、彼の人生におけるこの隠された事実を1978年の『レイバー・ヒストリー』誌のタフト追悼号に載せられた彼のインタビュー記事によって初めて知つたのである。彼のIWW論文は自分自身の経験のルーツを追求したものだったのである<sup>41)</sup>。

彼は1902年ニューヨーク州シラキューズで生まれたが、3歳か4歳の時に父親が死亡（父オットー・タフトが社会党の重要な活動家だったとの情報もあるが、正確なことは不明）し、母とともに各地を転々と移動した後、14歳までニューヨークで暮らした。母は不熟練労働者で生計は苦しかった。母と仲たがいしたタフトは14歳以前に働きに出た。10年間彼は工場労働者、船の石炭人夫、移動収穫労働者、油田労働者、材木労働者など、転々と職を変えながらアメリカ各地を放浪した。そして1917年収穫労働者として働いていた時にIWWに加入した。彼はIWWの農業労働者産業別組合の組織化委員会の委員その他として活動し、またIWWの機関紙に幾つかの論文を寄せた。

彼は述べた。「私は小学校を完全には済まさなかった。私は小学校を修了しなかった合衆国における唯一の教授だろう」と。彼は読書が好きになったが、図書館で、またIWWのホールで本を読んだ<sup>42)</sup>。彼が肉体労働者として過ごし、

*History*, New York, 1964.

<sup>41)</sup> Taft, "The IWW in the Grain Belt," *Labor History*, Vol. 1, No. 1, Winter 1960; Taft, "The Federal Trials of the IWW," *Labor History*, Vol. 3, No. 1, Winter 1962; Taft, "The Bisbee Deportation," *Labor History*, Vol. 13, No. 1, Winter 1972.

<sup>42)</sup> "Portrait of the Labor Historian as Boy and Young Man: Excerpts from the Interviews of Philip Taft by Margot Honig," *Labor History*, Vol. 19, No. 1, Winter 1978, pp. 39-71; David Brody, "Philip Taft: Labor Scholar," *Labor History*, Vol. 19, No. 1, pp. 9-22; Penelope H. Thonberg, "Philip Taft, The Teacher," *Labor History*, Vol. 19,

労働者の感覚を身につけ、IWWの活動家だったことは重要である。彼の研究は労働者的現実主義を身につけた上で、サンディカリズム的なIWWの革命的経済主義からAFL的な保守的経済主義に転じたことを反映している。現実主義的な労働者階級的感覚が彼の著作に漂っているのである。

## VII 戦後の旧左翼労働史学

### (1) 啓蒙的な諸作品

「赤い10年間」と言われた1930年代の余波は戦時を経由して1950年代初期まで残っており、旧左翼的、すなわち社会民主主義的および共産主義的な労働史研究が存続した。ここでは邦訳された啓蒙的書物を5点紹介しておこう。戦争直後の日本に紹介されたのがハロルド・U・フォークナーとマーク・スターによる『米国労働運動史教程』(1948)年である。フォークナーは1924年以来版を重ねた『アメリカ経済史』の著者であるが、社会党員として1932年マサチューセッツ州議会の議員候補として社会党から立候補したことのある社会主義者だった。スターはイギリス炭坑夫の出身で、アメリカに移住し、労働者教育事業に参加、国際婦人服労組の教育部長、アメリカ教師連盟の副会長などを勤め、占領期の日本を訪れ、占領軍の教育顧問として日本の労働組合結成を励ました<sup>43)</sup>。

1950年代の日本で大変な評判となったのが、レオ・ヒューバーマンの『アメリカ人民の歴史』である。ヒューバーマンは労働者の子として生まれ、労働者教育に従事した人物であり、1949年以来ポール・スウィージーの独立的社会主义誌の『マンスリー・リヴュー』のグループに加

No. 1, pp. 24-30; "Philip Taft, Member of the Faculty at Brown University," *Labor History*, Vol. 19, No. 1, pp. 31-33.

<sup>43)</sup> Fink, ed., *Bibliographical Dictionary*, pp. 526-52; David A. Shannon, *Socialist Party of America: A History*, New York, 1955, p. 210.

わった。本書は労働者の歴史に限定されていないが、アメリカの働く民衆の歴史を歌い上げたものである。

アレン・オースティンの『アメリカ労働運動の歩み』は簡潔な著作ながら、好感のもてる作品である。彼女はヒューバーマンのアシスタントを勤めたことのある人物と解説されているから、社会民主主義者だったのであろう。R.O.ボイヤーとH.M.モレイズによる『アメリカ労働運動の歴史』(1955年)も出た。ウィリアム・Z・フォスター『アメリカ合衆国共産党史』(1952)も翻訳されたが、当時の共産党の状況を反映して、スターリン主義的色彩の濃厚な本である<sup>44)</sup>。

### (2) フィリップ・S・フォーナー(1910~ca. 94)

戦後のアメリカには旧左翼的な労働史研究の聳えたつ巨人が出現した。フィリップ・S・フォーナーである。1992年までに10巻出された彼の『合衆国労働運動史』<sup>45)</sup>は、まさにウィ

<sup>44)</sup> Harold U. Faulkner and Mark Starr, *Labor in America*, New York, 1944 (労働省労政局監修『米国労働運動史教程』中央労働学園発行, 1948年); Faulkner, *American Economic History*, New York, 1924, 1931, 1935, 1938, 1943, 1949, 1954 (小原敬士訳『アメリカ経済史』至誠堂, 1968年); Leo Huberman, *We, the People*, 1947 (小林良正・雪山慶正訳『アメリカ人民の歴史』岩波新書, 上下, 1954年); Alein Austin, *The Labor Story* (雪山慶正訳『アメリカ労働運動の歩み』上下, 青木書店, 1954年); R.O. Boyer and H.M. Morais, *Labor's Untold Story*, New York, 1955 (雪山慶正訳『アメリカ労働運動の歴史』上下, 岩波書店, 1959年); William Z. Foster, *History of the Communist Party of the United States*, New York, 1952. (菊地謙一・鈴木正四他訳『アメリカ合衆国共産党史』上下, 大月書店, 1954年)

<sup>45)</sup> Philip S. Foner, *History of the Labor Movement in the United States*, 10 vols., New York, 1947-92. の巻別の題名と刊行年は以下のとくである。Vol. I: "From Colonial Times to the Founding of the American Federation of Labor," 1947; Vol. II: "From the Founding of the AFL to the Emergence of American Imperialism," 1956; Vol. III: "The Policies and Practices of the AFL, 1900-1909," 1964; Vol. IV: "The Industrial

スコンシン学派に対する挑戦状であった。1947年彼はその第一巻の序文において、次のように書いた。「近年の諸事件はアメリカ労働運動の歴史についてのこの〔ウィスコンシン学派の〕分析を完全に粉碎してしまった。CIOの台頭、産業別組合主義を通じての大量生産産業の組織化、近年の闘争で樹立された黒人・白人両労働者間の統一、そして1935年以降の政治的領域で、また世界的規模での反ファシズムの労働運動が及ぼした大きな影響」は、ウィスコンシン学派が唱える政策がいかに間違っているかを示したばかりでなく、「この学派が歓呼した諸政策が廃棄されるべきであることを示している<sup>46</sup>。」

冷戦、反共ヒステリー、左翼の弾圧の中で、フォーナーはマルクス・レーニン主義的な立場を守り続けて孤軍奮闘した。彼は1910年ニューヨーク市に生まれ、ニューヨーク市立大学卒業後、コロンビア大学大学院に進み、アラン・ネヴィン教授の下で学び、1941年に博士号を取得した。この博士論文に基づいて出版された彼の最初の本が、南北戦争勃発直前におけるニューヨークの実業家集団と綿花王国との関係を論じた『実業と奴隸制』(1941)である。彼はニューヨーク市立大学で教職についたが、1941年に赤狩りの犠牲になり、職を失った。それから彼の苦難が始まったのである<sup>47</sup>。

---

Workers of the World, 1905-1917," 1966; Vol. V: "The AFL in the Progressive Era, 1910-1915," 1980; Vol. VI : "On the Eve of American Entrance into World War I," 1982; Vol. VII : "Labor and World War I, 1914-1918," 1987; Vol. VIII: "Post-War Struggles, 1918-1920," 1988; Vol. IX: "The TUEL to the End of the Gompers Era," 1991; Vol. X: "The TUEL, 1925-1929," 1992.

<sup>46</sup> P. S. Foner, *History of the Labor Movement in the United States*, Vol. 1, New York, 1947, p.11.

<sup>47</sup> Philip S. Foner, *Business and Slavery*, Chapel Hill, 1941; Melvyn Dubofsky, "Give Us That Old Time Labor History: Philip S. Foner and the American Worker," *Labor History*, Vol. 26, No. 1, Winter 1984, pp. 118-119; Krueger,

### (3) フォーナーの研究・著作活動

彼の著作はマルクス・レーニン主義的な定式に沿っており、古めかしい感じが強いが、その著作は驚くべき精力を注入しての膨大な資料の発掘に基づいている。ゼロックスのない時代における彼の資料収集は超人的なものであった。彼の『合衆国労働運動史』第1巻は植民地時代からAFLの設立までを扱ったが、第2巻以後、1991年に出された第10巻まではAFL創設以降、1920年代末までの労働運動の歴史を精密に辿ったものである。ウィスコンシン学派の『合衆国労働史』全4巻がコモンズの多数の弟子たちによって執筆されたのに対して、フォーナーの『合衆国労働運動史』全10巻はただ一人の仕事だった。

1960年代に入ってアメリカでラディカリズムが復活するようになってから、フォーナーは水を得た魚のように嬉々として膨大な著作を刊行し、労働運動史の多様な諸問題について書いた<sup>48</sup>。1877年の鉄道大ストライキについての『1877年の大蜂起』(1979), 『19世紀アメリカの労働歌』(1975), IWWの『ジョー・ヒル裁判事件』(1965), IWWのフリースピーチ闘争を扱った『仲間の労働者・友人たちよ』(1981), かつて革命的社会主义者だった時期の三重苦のヘレン・ケラーを扱った『ヘレン・ケラーの社会主義時代』(1967), カール・マルクスが1883年に死亡した時の反響を扱った『カール・マルクスが死んだ時』(1973), アメリカ史上の諸変革運動が依拠した合衆国独立宣言の精神的継承を編集した『我ら他の人民』(1976), ロシア革命の影響を論じた『ボルシェヴィキ革命』(1967)などが次々に出た。そして『女性とアメリカ労働運動』2巻(1979-80),

---

"American Labor Historiography," p. 281.

<sup>48</sup> Sally Miller, "Philip Foner and Integrating Women into Labor History and African-American History," *Labor History*, Vol. 33, No. 4,

ロナルド・L・ルイスとの共編『黒人労働者、史料集』8巻(1978-1984)などをはじめとする黒人労働者や女性労働者についての膨大な量の書籍を執筆・編纂し、「女性と非白人大衆を学問的忘却から救った」のである。なんと彼は130冊以上の本を刊行した。労働運動史以外にも著作は多い。トマス・ペイン、ジャック・ロンドン、フレデリック・ダグラスなどの著作選集、著名なラディカル派の著作・書簡・演説集、キューバと米国の関係、女性史、黒人史など多岐にわたった<sup>49)</sup>。

#### (4) フォーナーの『合衆国労働運動史』とコモンズらの『合衆国労働史』を比較して

彼の労働史研究の特徴をウィスコンシン学派のそれと比較したデュボフスキイの論文を参照しながら、まとめてみよう。フォーナーはウィスコンシン学派の立場を否定し、マルクス・レーニン主義的立場から、民主主義と平等を求める大きな政治的・社会的闘争の中に労働者を編入するような労働史、「賃金制度を廃止して、新しい、より良い社会制度で現在の社会秩序を置き換える必要」を認めるような歴史を描こうとした。しかし彼の著作には理論的論議は欠如していた。マルクス主義者として書きながらも、歴史的主題としての労働者階級についての、また労資関係についての理論づけは提出されていない。マルクス・レーニン主義的解釈の尺度が

---

Fall 1992, pp. 456-469.

<sup>49)</sup> Philip S. Foner, *The Great Uprising of 1877*, 1979; Foner, *American Labor Songs of the Nineteenth Century*, 1975; Foner, *The Case of Joe Hill*, 1965; Foner, *Fellow Workers and Friends*, 1981; Foner, *Helen Keller: Her Socialist Years*, 1967; Foner, *When Karl Marx Died : Comments in 1883*, 1973; Foner, *We the Other People*, 1976; Foner, *The Bolshevik Revolution*, 1967; Foner, *Women and the American Labor Movement*, 2 vols, 1979-80; Foner and Ronald L. Lewis, eds., *The Black Worker : A Documentary History from Colonial Times to the Present*, 8 vols., 1978-1984.

労働史の進展に適用されているだけである。デュボフスキイはいう。「事実と事件と人々が彼の歴史叙述の中を行進している。解釈が必要なところで判定が下される。フォーナーは彼の歴史的悪者を非難し、彼のヒーローを賞賛する。」彼の立場から労働運動が進むべき正しい路線に沿っているか、外れているかで運動や指導者が判定されるのである。

しかし彼の『労働運動史』が優れていた点は彼が歴史学者だったことからきた。彼はアメリカ革命、奴隸制反対闘争、南北戦争、ポピュリズム、革新主義、その他、広い歴史的諸問題に関心を寄せ、それらにおける労働者・労働運動の役割に関心を寄せて書いた。コモンズ学派がこのような歴史学的なテーマを無視し、労働市場の成長と発展、労働組合の制度的発展、賃金、組合員数などに関心をよせたのに対して、フォーナーはアメリカ史上の諸事件と労働者との関連にスペースを割き、労働者がアメリカ民主主義の進展において最も進歩的な要素だったことを実証しようと努力したのである。

また彼は黒人、移民、女性労働者といった主題に強い関心を寄せた。ウィスコンシン学派が中国人労働者排斥運動を擁護し、移民制限に賛成の立場をとったのに対して、フォーナーははっきりと人種差別主義を批判した。しかしウィスコンシン学派が関心を寄せた科学的管理など労務管理に関する事柄、賃金、労働条件、生活水準の問題には比較的関心を寄せず、生活苦に苦しむ一般労働者と「労働貴族」とを対比させた。

フォーナーの労働史の研究範囲についてデュボフスキイは、「詳細および範囲においてコモンズのそれとほとんど違わない」と述べる。「フォーナーはただ価値および『用語』を逆転させているだけである。彼は反資本家を称賛し、労資

協調論者を非難する。しかし過度にイデオロギー的な粉飾を剥ぎ取ってしまえば、これらの多巻の歴史書は労働史家が調査すべき要因について同意している。すなわち労働組合、左翼政党、雇い主の労働政策、政府と労働者との相互作用、そして産業紛争。つまりフォーナーは歴史家として書いたが、彼の理解する労働史とは、労働経済学者の場合と同様に、狭義の「労働運動史」だったのである<sup>50)</sup>。

## IX 歴史学と労働史

### (1) 労働史に対する歴史学者の態度

この間、アメリカの歴史家たちは、アメリカ史における労働者の存在を必ずしも軽視したのではなかったが、フィリップ・S・フォーナーを重要な例外として、自己の研究領域として労働史に取り組む学者は極めて少なかった。一般的に労働史は労働経済学者の領分と考えられていたのである。

歴史学は伝統的に「上品な」学問であり、歴史家はアングロサクソン系の中産階級出身者が大部分だった。後に代表的な新労働史学者となるハーバート・ガットマンがウィスコンシン大学歴史学科の大学院で学んでいた時、パールマンは同じユダヤ系のガットマンに向かって、「歴史はアングロサクソンの専門職」なのだから、経済学者として労働史を勉強したほうが機会に恵まれるよと忠告したという。また歴史家には農村的地域の出身者が多く、フロンティア理論が広がったのにはこのような背景があったのだともいう。黒人と女性だけでなく、カトリックもユダヤ系もアイルランド系も南・東ヨーロッパ系の歴史家もほとんどいなかった。『アメリカ大学教授名簿』の調査によれば、女性がほとんどいないことがわかるが、近着移民系統の者は女性よりもさらに少なかったという。第二次

<sup>50)</sup> Melvyn Dubofsky, "Give Us," pp. 118-137.

大戦以後のG Iビルによって移民と労働民衆の息子たちが歴史学のプロフェッショナルに入るが、彼らが大学院を卒えて研究者として頭角を現すには1960年代を待たねばならなかつたのである<sup>51)</sup>。

アメリカの歴史家が労働史に关心を寄せなかつた重要な理由はアメリカ史展開の特質にあつた。ヨーロッパ諸国では労働運動は労働党や社会民主党、共産党といった階級政党の歴史と切り離しがたく絡み合い、また政治的大事件に際しては「階級の旗印の下に」大きな動きをみせた。これに対してアメリカでは労働運動の主流が階級政党を樹立せず、階級独自の政治運動を回避し、経済闘争に専念する「ビジネス・ユニオンズム」を確立した。このため政治史を中心とする旧来の「アメリカ史」と「アメリカ労働史」との間にはかなりのギャップが存在してきたのである。また歴史学の学生が労働史研究を志した場合、労働経済学の分野における大量の研究業績と複雑さに圧倒されるし、また経済学部の労働関係のセミナーに入れて貰っても、そこでは団体交渉プロセスに关心が集中し、「タフト・ハートレー法以前の事柄は古代史」と考えられがちだったというのである<sup>52)</sup>。

### (2) 歴史家たちによる労働史研究

それでも20世紀前半のアメリカの歴史学で大きな流れだった革新主義史学は、アメリカ史の中心テーマとして社会的抗争を強調し、進歩的民衆の闘争が社会改革と民主主義の前進を獲得してきたと捉えることが多かつた。チャールズ・A・ビアードの妻のメアリー・R・ビア

<sup>51)</sup> Ira Berlin, "Introduction: Herbert Gutman and the American Working Class," in Ira Berlin, ed., *Herbert G. Gutmann, Power and Culture: Essays on the American Working Class*, New York, 1987, p. 10; Galenson, "Reflections," p. 91.

<sup>52)</sup> Bornet, "The New Labor History," pp. 19-20.

ドは『アメリカ労働運動略史』（1929）<sup>53)</sup>を書いた。社会的抗争を重視する歴史家の傾向は1930年代にはマルクス主義の影響を受けて、さらに強化された。

歴史家たちの間では労働組合運動、そして「労働問題」については労働経済学者の分野であり、歴史家の出番ではないと考えられたが、それ以外の分野では様々な歴史学者が労働史に関与していた。植民地時代から共和国初期の時代、すなわちまだ組織された労働運動が存在しなかつた時代については、経済学者よりもむしろ歴史家の領域だった。植民地時代の労働者や白人奉公人に関しては、アボット・E・スミス『拘束された植民者たち』（1947）、カール・ブライデンボー『植民地の職人たち』（1950）、マーカス・ジャーネガン『アメリカ植民地における労働・依存階級』（1931）などの研究が知られているが、何といってもリチャード・B・モ里斯の『初期アメリカにおける政府と労働者』（1946）がイギリス本国の重商主義的な支配下にあった植民地の労働者についての包括的調査を盛り込んだ最も重要な書物だった<sup>54)</sup>。

ジャクソン民主主義と労働者との関連も歴史学者の間で大きな論争を呼んだ。ターナーのジャクソン民主主義=西部農民説に対してアーサー・M・シュレジンガー二世は『ジャクソンの時代』（1945）において東部労働者階級説を唱えた。彼は資本主義の発展による階級的矛盾の発生こそ改革への要求を生み出したのだと考え、東部労働者こそジャクソニアン民主主義の主要

<sup>53)</sup> Mary R. Beard, *A Short History of the American Labor Movement*, New York, 1929.

<sup>54)</sup> James R. Wason, "American Workers and American Studies," *American Studies International*, Winter 1974, pp. 15-16; Abbott E. Smith, *Colonists in Bondage*, Chapel Hill, 1947; Carl Bridenbaugh, *The Colonial Craftsmen*, New York, 1950; Marcus Jernegan, *Laboring and Dependent Classes in Colonial America*, New York, 1931; Richard B. Morris, *Government and Labor in Early America*, New York, 1946.

な担い手だったとする解釈を展開した。本書は多くの歴史学者を刺激した。ウォルター・ヒューゲンズ『ジャクソン民主主義と労働者階級』（1960）はニューヨーク労働者党運動について、ウィリアム・A・サリヴァン『ペンシルヴェニアの産業労働者, 1800-1840』（1955）はペンシルヴェニア州の労働運動について論じた。他方、リチャード・B・モ里斯はストライキ鎮圧のためのジャクソン大統領の連邦軍派遣について論じた。リチャード・ホーフスタッターの『アメリカの政治的伝統』（1948）はジャクソン時代を産業資本主義の展開という観角から把握しながらも、シュレジンガー二世とは逆にジャクソン民主主義の主要な担い手を特権打破と自由競争を要求した台頭期の中小ブルジョアジーに求めたのだった<sup>55)</sup>。

労働組合運動史が労働経済学者の領域となつたのに対して、歴史研究者たちはラディカルな社会変革運動の調査に向かうことが多かった。19世紀前半にアメリカ各地で展開されたユートピア的共同体建設運動、いわゆるコミュニティアニズムについてはアーサー・E・ベスター『辺境のユートピア』（1950）などの研究があり、土地改革運動についてはヘレーン・S・ザーラー『東部労働者と全国土地政策』（1941）が出た。アナキストのハイマー・ケット事件についての古典的名著、『ハイマーケット事件の歴

<sup>55)</sup> Arthur M. Schlesinger, Jr. *The Age of Jackson*, Boston, 1945; Walter Hugins, *Jacksonian Democracy and the Working Class*, Stanford, Cal., 1960; William A. Sullivan, *Industrial Worker in Pennsylvania, 1800-1840*, Harrisburg, Pa., 1955; Richard B. Morris, "Andrew Jackson, Strikebreaker," *American Historical Review*, Vol. 55, No.2, October 1949; Richard Hofstadter, *The American Political Tradition and the Men Who Made It* (1948) (田口富久治・泉昌一訳『アメリカの政治的伝統—その形成者たち』上、下、岩波書店, 1959—1960年); ジョン・ウォード「コモンマンの時代」(野村訳)およびその解説、ジョン・ハイアム編(同志社大学アメリカ研究所訳)『アメリカ史像の再構成』小川出版, 1970年, 107-108, 290-292頁。

史』(1936)を著したヘンリー・デイヴィッドはコロンビア大学でアラン・ネヴィンスの下で学んだ歴史家である。そしてレイ・ジンジャーはイリノイ州の改革派知事のアルトゲルド、社会党指導者ユージン・デブスの優れた伝記を著した。社会主義史に関してはハワード・H・クリント『アメリカ社会主義の形成』(1953)、アイラ・キプニス『アメリカ社会主義運動』(1952)があるが、デイヴィッド・A・シャノン『アメリカ社会党』(1955)はアメリカ社会党史の決定版となった。さらにアメリカ社会主義史の多様な側面に関しては、D・エグバートとS・パーソンズ編の『社会主義とアメリカ生活』2巻(1952)が刊行されたことが重要である。歴史家ではないが、社会学者のダニエル・ベルが寄稿した「合衆国におけるマルクス派社会主義の背景と発展」は極めて優れたものであり、後に『合衆国におけるマルクス派社会主義』(1967)として出版された。こうして「労働組合運動史」は経済学者に委ね、労働運動が展開していない古い時期について、またラディカリズムについては主として歴史家による多様な研究が展開されたのである<sup>56)</sup>。

<sup>56)</sup> A. E. Bestor, Jr., *Backwood Utopia*, Philadelphia, 1950; Helene S. Zahler, *Eastern Workingmen and National Land Policy, 1829-1862*, New York, 1941; Henry David, *The History of the Haymarket Affair*, New York, 1936; Ray Ginger, *Altgeld's America*, New York, 1958; Ray Ginger, *The Bending Cross: A Biography of Eugene Debs*, New Brunswick, N.J., 1949; Howard H. Quint, *The Forging of American Socialism*, Columbia, S.C., 1953; Ira Kipnis, *The American Socialist Movement, 1877-1912*, New York, 1952; David A. Shannon, *The Socialist Party of America: A History*, New York, 1955; Donald Egbert and Stowe Persons, eds., *Socialism and American Life*, 2 vols., Princeton, N.J., 1952; Daniel Bell, "The Background and Development of Marxian Socialism in the United States," *Socialism*; Bell, *Marxian Socialism in the United States*, Princeton, 1967.

## X 1950年代労働運動への批判

### (1) 新保守主義史学

ところで1950年代は上りつめてきたアメリカ労働運動の絶頂であり、かつた労働運動が体制内化し、保守化した時代であった。戦後のアメリカの経済的繁栄の中で、労働者一般についても、その中産階級化が盛んに指摘され、「ハッピー・ワーカー」のイメージが広がり、「豊かな社会」の中で労働者の階級意識はほとんど消滅したとの観念が抱かれた。それと同時に多くのリベラルな研究者たちの間には、かつて労働運動に寄せた強い共感を放棄し始める動きが生じた。

1950年代に有力となったR・ホーフスタッターやルイス・ハーツなどによる「新保守主義史学」の潮流は、アメリカ史の中心テーマとして闘争の概念を放棄し、「コンセンサス」(意見の一一致)を強調した。彼らの解釈によれば、封建的伝統を欠いたアメリカは最初から自由主義社会として成立した。アメリカ史上の対立はその外見上の激しさにもかかわらず、ロック的自由主義の枠組みの内での対立にすぎない。自由主義を唯一絶対のイデオロギーとするアメリカでは階級的思考に立脚する真の急進主義は育ちえない。旧世界の近代史が封建反動と自由主義、さらに社会主義という本質的対立をはらんで展開されたことに鑑みると、アメリカ史は世界史の例外を構成する。アメリカ人は植民地時代以来、人民主権、私有財産、競争的経済制度といった事柄について「意見の一一致」を享受してきたのであり、アメリカには革命どころか、真の対立抗争もなかったというのである。

このような新保守主義史学はアメリカ史における社会的抗争の存在を想起せしめるような諸テーマを回避するとともに、労働者その他の一般民衆を逆マックレーリングの対象とすることを特徴としていた。その典型的事例がホフスターの『アメリカ現代史—改革の時代』

(1955)におけるポピュリズムの取り扱いだった。ジョン・D・ヒックスらの革新主義史学者によって独占資本による収奪に立ち向かった西部農民の英雄的な抗議運動として高く評価されたポピュリズムも、ホフスタッターによると過去回顧的努力にすぎず、その思想は自己欺瞞、反ユダヤ、反黒人、反移民の偏見に色濃く染められていたというのである。

20世紀初頭の革新主義運動に関してはホフスタッターは、運動の中核的担い手として旧来の都市中産階級を考え、彼らが巨大資本と組織労働の両者に挟まれて地位が低下したと感じたことに改革運動への動機が生じたと考えた。そして彼は主として移民からなり、腐敗したボス・マシーンと結びついた都市民衆を革新主義者の改革志向に対立した保守勢力として描いた。都市民衆=労働者=保守勢力とする見方はオスカー・ハンドリンらの移民史学においても採用された。

このような解釈が広がった背景には、戦後アメリカの保守化傾向があり、またマッカーシズムへの恐怖が作用していた。1930年代に左翼に近付いた歴史学者たちの間で、マルクス主義的解釈を放棄する動きが広がった。ホフスタッターもミズーリにおいて共産党経験をもっていたのである。急進主義からの歴史家たちのこの離反の重要な原因は赤狩りによる失職に対する恐れが大きかった。多くの歴史家が怯え、労働運動史や急進主義史という危険なテーマから遠ざかっていったのである<sup>57)</sup>。

<sup>57)</sup> Richard Hofstadter, *The Age of Reform*, New York, 1955 (斎藤真・清水知久他訳『アメリカ現代史—改革の時代』みすず書房, 1967年); Jonathan M. Wiener, "Radical Historians and the Crisis in American History, 1959-1980," *Journal of American History*, Vol. 76, No.2, September 1989, pp.402-403; William L. Neumann, "Historians in an Age of Acquiescence," *Dissent*, vol. 4, No.1, Winter 1957, pp. 64-69; Oscar Handlin, *The Uprooted*, Boston, 1951.

## (2) リベラル派知識人・左翼による労働運動批判の高まり

かつて組織労働に対して共感を寄せたリベラル派の知識人が1950年代にはアメリカの組合に対して批判の声を挙げ始めた。彼らは組合の内部に作用している非民主的で寡頭制的な傾向、さらには指導部に生じた腐敗現象に注目するようになった。モーリス・ニューフェルドはそのような研究者の例としてC・A・マディソン、J・B・S・ハードマン、セイマー・M・リップセット、ジャック・バーバッシュ、ジョウエル・サイドマンなどの名前を挙げ、このような動きは腐敗と保守化に対する知識人本来の批判的機能を示すものとして正当化するが、ペン・ケンブルが指摘するように、そこには社会全体の動きに促されての知識人の側の保守化も作用していたのである<sup>58)</sup>。

体制内化した労働組合運動に対しては左翼的知識人の側でも幻滅が著しくなってきた。この幻滅を象徴する人物は言うまでもなくC・ライト・ミルズだった。『新しい権力者たち』(1948)は組合幹部たちを批判的に分析し、かつて強い「社会的意識」をもった諸組合も、経営側の利益に立って労働者を統制する機関になっていると説明した。『パワー・エリート』(1959)においてミルズの不信はさらに高まった。そして1960年イギリスの新左翼雑誌に寄せられた「ニューレフトへの手紙」(1960)において、彼は発達した資本主義社会の労働者階級が歴史の本質的原動力を構成するという信念とは反対方向に歴史は進行していると論じた。

<sup>58)</sup> Maurice F. Neufeld, "The Historical Relationship of Liberals and Intellectuals to Organized Labor in the United States," *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, No. 350, November 1963, pp. 115-127; Robert Zieger, "Workers and Scholars," p. 246; Penn Kemble, "Rediscovering American Labor," *Commentary*, April 1971, pp. 45-46.

根本的社会変革の担い手として労働者階級に絶大な期待を寄せてきた左派の間で労働者への幻滅が訪れたのである。社会主義者として留まつたヒューバーマンやポール・スウェイジーの『マニスリー・レヴュー』のグループも、独占資本、軍産複合体、さらに第三世界の反帝国主義運動に対して強烈な関心を寄せるが、高度に発達した先進資本主義諸国の労働者階級・労働運動に対しては関心を寄せないという態度をとったのである<sup>59)</sup>。

### （3）新しい歴史家の世代

1950年代には、労働者階級および移民の背景をもつ若い研究者たちがアメリカ史研究に入り始めた。彼らは自分たち自身の歴史的背景を

調査しようとした。こうして労働史に関心を寄せる大学院生たちが育ち始めた。デイヴィッド・ブロディ、メルヴィン・デュボフスキイ、ハーバート・ガットマン、デイヴィッド・モンゴメリーなど、「新労働史学者」の第一世代が労働史研究を開始した。しかしブロディが述べたように、まだ「ベルは鳴らなかった」。1950年代は政治的黙従、コンセンサスの時代だったからである。しかし1960年代のラディカルな諸事件がその全てを変えた。他方、若い経済学者の間では、それまでの制度学的アプローチはもっと理論的な関心に道を譲りつつあった<sup>60)</sup>。こうして新しい労働史学の主要な担い手は経済学者から歴史学者に移っていくのである。

---

<sup>59)</sup> Paul Buhle, "Marxism in the United States," in Bert Grahl and Paul Piccone, eds. *Towards a New Marxism*, St. Louis, 1971, p. 208; C. Wright Mills, *The New Men of Power*, New York, 1948(河村望・長沼秀世訳『新しい権力者—労働組合幹部論』青木書店, 1975年) ; Mills, *The Power Elite*, New York, 1959(鵜飼信成・綿貫謙治訳『パワー・エリート』上下, 東京大学出版会, 1958年) ; Mills, "Letter to the New Left," *New Left Review*, No. 5, 1960, reprinted in *Studies on the Left*, Vol. 2, No.1, 1961.

---

<sup>60)</sup> Robert Ozanne, "Trends in American Labor History," *Labor History*, Vol. 21, No. 4, Fall 1980, p. 513; Brody, "The Old Labor History and the New: Search of an American Working Class," *Labor History*, Vol. 20, No.1, Winter 1979, p. 112; Brody, "Workers and Work in America: The New Labor History," James B. Gardner and George Rollie Adams, eds., *Ordinary People and Everyday Life : Perspectives on the New Social History*, Nashville, Tenn., 1983, 143.「新労働史学」については野村「アメリカ労働史研究の新しい潮流」『歴史評論』No.341, 1978年9月, 44-55頁。